

被爆 76 周年原水爆禁止世界大会 長崎大会 第 2 分科会報告

第 2 分科会「核燃料サイクル政策の破綻、なぜ日本は決断しないのか」では、4 名の方から講演、報告が行われました。

澤井正子さんは、夢のエネルギーだと開発が進められてきた約 70 年弱の原子力発電の歴史、発電所の仕組み、ウランの加工工程など、原子力発電についてのイロハを説明されました。

日本の核燃料サイクルは問題点だらけです。ウランの加工はあらゆる工程を経るので最短でも 2 年かかり、しかも、全て外国任せです。輸送についてもスエズ運河を通れないために南アフリカや南アメリカ経由であるなど効率が悪く、CO₂ による環境負荷が大きい発電方法であると、誰が聞いてもわかるものです。

ウラン採掘にあたる労働は、どのような人が担っているか。それは例えば先住民族などが担っています。社会的差別構造や労働者、その住民の被爆、その土地の環境汚染、残土の置き去りなど、日本で電気を使うために、今列挙したことをすべて外国に置き去りにしています。

今のところ、たまたま輸送中の事故はないものの、海上で事故があれば世界中の海が汚染されます。

過疎地はエネルギーの供給基地、処分地とされていき、補助金で自治体財政的に抜け出せなくなっています。電力会社はここまでお金をかけたのだから回収せねばと抜け出せません。時間稼ぎとしか言いようのないプルトニウム利用。このように一度始めたらやめられないのは日本政府の体質なのかもしれませんが、澤井さんは 1 日でも早く原発の運転を止め、脱原発を実現すべきだと講演しました。

原水禁鹿児島県民会議の磨島さんからは「川内(せんだい)原発」、そして原水禁佐賀県協議会宮島さんからは「玄海原発」について、それぞれ 20 年稼働延長問題について報告がありました。

川内原発は、原子力規制委員会から、特定重要事故等対処施設の設置を条件に再稼働が承認されたため、2,420 億円をかけてその建設が進められています。

同じく玄海原発も、特定重要事故等対処施設と、使用済み燃料の収納棚の間隔を狭める形で燃料の収納数を増やす「リラッキング」、乾式貯蔵施設を整備しようとしていることが報告されました。リラッキングと乾式貯蔵で稼働年数が 14 年延長となります。

九州電力は、川内、玄海のこれらの工事に総額四千数百億円を投じるので、費用回収のために、どちらも 20 年延長を申請するのは確実です。

しかし、どちらも避難計画が非現実的です。換気、エアコン使用ができないまま屋内にい

ること、避難時に道路が渋滞すること、避難所とされている施設が座席固定のされているホールも含まれていることなど、原子力防災の手引きには無理があります。

ただ、原発をめぐる問題は、暗い話ばかりではありません。今年4月、鹿児島県南大隅町の町長選では核ゴミ処分場誘致が争点となり、反対を訴えた3人のうち2人の候補が圧倒的に票を集めたこと。また、裁判で大飯原発3、4号機設置許可取り消しや、東海第2原発が避難計画不備により運転を認めないとの判決が出されたことです。

そして、さらに明るい光と私が感じたのは、もう1人の報告者「Friday for Future 長崎」高校2年生、岩瀬愛佳さんの活動内容報告を挙げたいと思います。

どうしたら同年代の若者が環境問題に興味をもってくれるかを考えながらイベントを開催したり、県議会議員と対話したりしながら、気候非常事態宣言を出してもらうための請願を実施しているとのことでした。現在、長崎県議会7会派中5会派と対話しており、9月定例会での宣言実現に向けて活動していること、仲間の輪を広げているとの報告、原発への関心の高さに、世代間のバトンが受け継がれていることを感じました。

4名の話ぜひ視聴していただきたいですし、澤井さんが紹介した、YouTubeで公開されている「日本と原発 4年後」という映画も見たいと思います。

以上で分科会報告を終わります。

運営委員／西部真紀子（北海道）